軍隊の体験

河野百雄

私の戦争体験について、記録することとした。

私が軍隊へ入隊せよとの令状を受取ったのは、昭和十九年十一月一日のことであった。

その当時私は朝鮮の京元線の福溪駅の車号掛として勤務していた。令状を受取ってから生れ故郷の速見郡川崎村に帰えった、親兄弟、親戚の人達と別れを告げ、再び朝鮮にもどり元山市の陸奥さん宅にお世話になった。

令状は十二月一日に会寧の第八五〇五部隊に入隊せよとのことでした。そして陸軍病院衛生兵用員ということであった。

十二月八日第八五〇五部隊は南方方面で転戦のため、会寧の隣りの城洋の港から出発した私達衛生兵用員六名は、衛生教育を受けるため残ることとなった。食事その他の業務は隣りの工兵隊にお世話になった。十二月十六日補充隊として、新潟の新発田から第七十五部隊がやって来た。

兵舎には、約四十名入り箱詰状態の生活が始まり三ヶ月の歩兵教育を受けることとなった。

教育の間合い、本部、大隊、将校集会所等の各当番兵として交代で勤務することとなった。

二十年二月五日、第一期の検閲が終り二等兵に昇進した。二月六日からは、衛生兵としての教育を受けるため、会寧陸軍病院に転属となった、教育期間は六ヶ月であり、人体構造、救急法、外科、内科等まであり、病気の内容、治療一般と厳しい教育が毎日続いた。戦局が急変する中、六ヶ月の教育が五ヶ月で打ち切られ、七月一日付で羅津陸軍病院に転属となった。

羅津陸軍病院は、院長以下軍医は五名であとは、下士官以下衛生兵十五名、看護婦二十名という小さな病院でした。

七月二十八日突然、元山から節子さんが面会に来た、院長の許可をもらい二日間外泊し、ホテルで二人で泊った、このことが二人にとって最後の別れとなった。

ところが八月七日突如としてソ連邦軍が宣戦布告して、満州へ北朝鮮へと国境を越え進行して来て戦争が始まった。

当日、となりの部隊の衛生兵の補助として、八時半頃に部隊に着き、訓練中に負傷した者の手当を済ませ帰える途中に空爆があり機銃掃射があり、訓練中の多くの兵士が死んだり負傷したり、大混乱となった、数時間後病院に帰えった。病院には誰一人もいませんでした。皆撤退した後でした。

会寧陸軍病院に行くしかないと考え、旅の準備をして出発した。その後二日間かかって会寧に到着したが病院はもぬけのからで撤退したあとであった。食糧を持てるだけもち、隣の歩兵部隊と行動を共にすることとなった。

古茂山というところに要塞があるので、そこで戦争の準備をしようということになり行軍を開始した。吉洲から汽車に乗って古茂山

に行くこととなった。古茂山に着く途中で大空襲に合い、汽車は動かなくなり、徒歩で行くこととなった。それからは南下を始めて敵から逃れるのが精一杯で、終戦を知ったのは、八月十七日であった。

十九日はソ連の捕虜となり、二十日には咸興の部隊に集結し、将校、下士官、兵と別々にされ北に向って行軍を開始した。

二十四日に列車でソ連に連行されるということを聞き、二十三日の夜、脱走することを決意し部隊から、はなれることとした。

それからは、一人単独の行動となり昼は山、夜はトンネルの中で寝た。九月二十二日北緯三十八度線を越え開城に着いた。そこで米軍のジープに乗せてもらい京城に着くことが出来た。

二十二日に龍山駅に行き昔の福溪駅の同僚に逢うことができたがどうすることもできなかった。二十三日に総督府に行き、戦災証明書をもらい受け、列車の乗車手続きをして、その日は龍山駅の鉄道寮に泊まった。

翌日、鉄道寮の寮母のお嬢さんの木村スマ子さんと逢いお金拾円を戴いた。二十四日列車で釜山駅に夕方到着した。十月四日の乗船予定であったが、簡単に乗船することはできなかった。

釜山に十日程滞在して税関の倉庫に泊ることとなった。十三日貨物船の廿州丸の船長の立花さんに逢い、乗船することが出来た。たまたま台風にあい佐賀の沖まで流されるはめとなった。そのため博多港に着くのが大変おくれた。だが無事に博多駅に着き夜行列車に間に合い、小倉で接続の日豊線の夜行列車に乗り、日出駅に夜半の四時に着くことが出来自宅に歸ることが出来た。